

令和7年度 第1回運営協議会議事録

開催日：2025 年 7 月 2 日 水曜日 14:15～15:35

於：プレゼンテーションルーム

出席者：

【委員（50 音順、敬称略）】岡崎 裕、木村 京子、黒田 浩継、田中 正視、林 洋平、山岡 里帆

【事務局員】松井校長、松原事務長、田中教頭、宮武首席、井戸本首席

【学校関係者】各分掌長、学年主任

1 連絡および報告事項

（1）学校の現状

- ・府立高校は多くの学校が定員割れ。本校も定員割れで、3 学年の合計生徒数は 479 名。
- ・府立高校では、エンパワメント、ステップスクール以外の学校が、令和 10 年度選抜に向けて学校改革（グランドデザインの作成など）に取り組んでいる。

（2）年間の行事計画について（教務部）

- ・今年度は 6 月に校外学習で万博を訪れた。
- ・入試などの日程も例年通りだが、特色枠入試の実施もありイレギュラーなことが起こる可能性がある。
- ・修学旅行は 11 月に沖縄方面へ行く予定。

2 協議事項

（1）令和 8 年度 使用教科書選定理由について（教務部）

- ・数学Ⅱと数学 B の教科書を東京書籍に変更。理由は、東京書籍の教科書は 1 問 1 答形式になっており、加えてレイアウトが見開きで問と解説が展開されており使用しやすい。

（2）令和 7 年度 学校経営計画について（校長）

- ・昨年度の第 3 回の時に審議した内容から変わっていない。
- ・鳥取高校との機能統合で泉南地域で唯一の普通科高校となった。特色のある教育、地域に信頼される学校づくりが我々の使命。
- ・中期的目標で重要視しているものの一つは、学校教育自己診断の授業満足度 75% 以上。
- ・特色ある教育活動の充実については、海外の高校との姉妹校提携が令和 7 年から本格的に始まる。現在、継続的に交流している姉妹校がない本校の場合は、今年度中に姉妹校提携を実施していく予定。大阪府が予算（学校ごとに生徒 1 名につき 10 万円で 20 名まで）をつけた。本校では次年度から、実際交流を行っていく。現地に行く以外は WEB 交流を予定。明日、本校でも国際理解教育委員会を開く。
- ・「地域の学校」という位置づけで地域連携を強めていく。泉南市の官公庁と連携し、本校の存続に協力してもらうことを依頼。泉南市が市政 55 周年で記念スタンプを作るが、その台紙を本校に依頼された。イラスト部に頼み、今月中に本校生徒デザインの台紙の記念スタンプができる。

- ・生徒の規律遵守に関しては地域からお叱りを受ける。1 番は通学マナー。来年から自転車の青切符制度が始まるため、通学マナーに重点を置き指導していく。
- ・進路状況は、コロナ禍に比べ、就職面では良好。
- ・地域へのアピールや中学生への広報活動として、学校案内・クリアファイルを作り変えたりして、広報活動にも尽力。さらに、学校HPについては、情報を最新にしたり、校長ブログをほぼ毎日更新している。
- ・悩みを抱えた生徒や家庭内でしんどさがあるヤングケアラー状態の生徒に対しての支援を、SC やSSW などを通じた外部機関にも連携をお願いしている。今年度SSWの運用方法が巡回方式に変更されているが、本校は基幹校ではなく巡回校。
- ・校舎は、泉南高校から引き継いだ校舎で、老朽化しており、危険箇所やトイレ設備は改修・修繕が必要。

《質疑応答》

- ・（岡崎氏）姉妹校提携の予算が付いたことは、国際理解教育を充実させる学校の目標と行政の背策が同じ方向性。姉妹校提携はエネルギーが必要だが、姉妹校提携することが目的になってはいけない。言語が違うのは当たり前だが、バックグラウンドの違いを理解した連携が必要。りんくう翔南高校の地理的な要素（田舎、海に近い）や、学校のテーマなど共通項を探し出して交流できるかが重要。ハートフルほいくコースのようなコースが設置されている学校が姉妹校だとよい。学校同士の国際協力をお願いしたい。
- ・（岡崎氏）開かれた学校については、地域の教育力（既存の資源）を活用していくべきである。例えば和歌山県の事業でジオパーク協議会が地域の環境保全を行う中では次世代をどう育成しアピールしていくかが重要で、JAMSTEC の研究者を招いて海洋科学の観点から世界各地の海岸でごみ拾いを同日に行い、国際的にデータを集めて、どう分析すべきかを高校生に考えさせる活動に和歌山県の海岸沿いの高校（10 校程度）が協力し、総合的な探究の時間に取り組んだ。地域のポテンシャルをもった企業や資源を活用していくべきである。
- ・（校長）姉妹校については府は長期的な姉妹校提携を想定している。本校は、保育を学ぶコースがあることや、海が近いなどの共通項がある姉妹校を考えている。府はエージェントと提携し、姉妹校を紹介したり、航空機や宿泊の手配をしてくれる。
開かれた学校に関しては、本校の理科の教員が地元の生物観察を行っており、これを地域の方協働できたらよいのでは。岡崎先生のアドバイスにあるような活動をしていきたい。
- ・（田中氏）泉南市には外国にルーツのある方が多く在住している。本校のNETは泉南市内の中学生と活動している。高校生が小中学校に来て一緒に授業をすると活性が上がると思う。地元根差した活動ができればよい。
- ・（山岡氏）地域のイベントに参加したり国際交流するなど、実社会に出たときに役立つ活動を充実させるのは良いこと。しかし、全国的にそこにたどり着くまでのインプット（知識）が欠落しており問題になっている。
- ・（校長）インプットの部分は大切。大阪府の学生は学力、強いては英語力が低い。国際交流はベースイン大阪を活用することが必須。インプット（英語力）の部分も学校教育で重視していきたい。

(3) 「府立高校改革グランドデザイン」(令和7年3月)に沿った入学者選抜における学校特色枠の設定について

- ・今年8月にグランドデザインを府教委に提出する。
- ・公立高校の志願者が減少している。高校での学び方が多様化し、中学卒業後ダイレクトに通信制高校に進学する割合が増えている。一方、全日制高校では不登校・中退生徒が増えており、大阪府は全国平均以上。公立高校の魅力を発信することが必要。全日制的府立高校にはエンパワーメントスクールやステップスクールなど多様な生徒に対応できる学校がある。また、海外にルーツのある生徒の増加に対して、海外にルーツのある生徒に対する選抜制度もある。既にある各校の魅力を発信していくということも含めて、各校がグランドデザインを決めることとなった。
- ・グランドデザインには「学校改革」「入試改革」「広報改革」の3つの改革の柱がある。本日は「入試改革」について、学校のアドミッションポリシーに則った入試改革を考えていきたい。特色枠として定員の10~50%までを特色枠で入学させることが可能。特色入試のメリットは、ミスマッチの減少、進路選択の柔軟性の増大、選考日前倒しにより進学準備期間が確保できるなどがある。デメリットは、特定の学校に志願者が集中する可能性があることや、筆記検査の翌日に特色枠の何らかの選抜を実施が可能となることが教員の負担の増加と選考手順の複雑化が伴う。一方、自己推薦文はなくなる方向性であるが現時点では明確に示されていない。以上を踏まえ、新しい選考方法で、どのような観点をどのように評価するのが良いかアドバイスをいただきたい。

《岡崎氏》今あるものをどう上手に見せていくかが大切。何をどう問うかが重要。特色枠入試は大学のAO入試と似ているが、高校のカリキュラムは大学とは違い、AO入試はそぐわないと考える。中学校の総合的な探究の時間がAO入試に対応するシステムになっていないのであれば問題である。中学校のポートフォリオも同様で、今後、高校サイドがどういったかたちで中学を支援できるのが鍵である。泉南市は和歌山大学と提携しているので、和歌山大学は泉南市立の学校に支援できるシステムになっている。それを活用し、一連の循環をつくることできれば、総合的な探究の時間などを活用して入試制度を入口から出口まで一本化できるのではないか。

《木村氏》中学校では、この制度には困惑している。泉南中学の生徒の保護者は、泉南高校卒業生が多く、近いこともあり馴染みがある。中学では生徒に高校でなにを学びたいのかを伝えている。中学生は、希望もあるが、不安も多い。基礎的な学習内容を学びなおしたい、コミュニケーション能力をつけたいという生徒がいる。地域でつながれるなら部活動などからでも構わないので一緒に活動をしたい。中学生は高校の敷地に入れるだけでうれしい。また、泉南市の地域フォーラムにりんくう翔南高校の生徒が参加していただけると嬉しい。コロナで自信がなくなった生徒や、例えば、将来英語をしゃべりたいから学びなおしがしたい生徒を今後も受け入れてあげてほしい。

《校長》定員割れしている現状があり、多様なニーズを持つ生徒と丁寧にかかわっていく。オープンな学校にしていきたい。

《黒田氏》学校経営計画に地域に信頼される学校とある。地域が学校になにを求めているのかということに立ち返ると、地域とどれだけつながれるかが重要。地域が大切にしたいと思っているので

あれば、官公庁と話をする中での課題を見つけていける。関空が近い、海が近いなどの特色を生かして課題を洗い出してニーズを掘り下げていけばそこから考えることができるのではないかな。

《岡崎氏》新型コロナ流行であまり言われなくなったが、ポートフォリオを活用して入試をすればよいのではないかな。ベネッセがポートフォリオについては蓄積がある。それが中学校と共有でき良い形になればよい。